



A L P S CAREER

＜シリーズ連載：今求められるキャリア開発 第44回＞

何でもやろうの精神で、 つながりを深めれば キャリアデザインは もつと面白くなる

分からないから面白い

「苦労は買ってでもしろ」。この言葉の重みが増してきたのは最近のこと。その時には乗り越えられないと頭を悩ませた障壁も、今では自分を成長させるための試練だったと思えるようになりました。社会人になってからの20年間で経験した苦労や失敗は、今でも自分の糧となっています。

年齢とキャリアを重ねて感じるのが「人とのつながりが宝物」であることと「無駄なことなど何もない」こと。それを理解していなかったのなら、今の私はありませんし、今のようなキャリアデザインもできなかったでしょう。このコーナーに寄稿することも10年前の自分には予想もつかなかったことです。

人生がどうなるかなんて簡単に予想できる

ものではありません。そう——だから人生は悲しく、そして面白いのでしょう。

数々の経験が今に生きる

平成6年、高校を卒業した私は社会の荒波に飛び込みました。18歳の私が持っていたものはちっぽけな知識や経験だけだったので、研修やOJTを重ねながら、いろいろな人からさまざまな考え方を教わりました。

28歳で役場に入庁するまでにいくつかの仕事を経験しましたが、一番役に立ったのは多角的に物を見ることができるようになったことだと思っています。自分が持っている常識は、社会全体での常識ではなく、その企業や仕事に対しての常識であることがあります。しかし、若かったり、経験が少なかったりするとそれが分からないことも多いで



辻口 浩二

大津町住民福祉部福祉課

【つじぐち こうじ】1975年熊本市生まれ。高校卒業後、平成6年に民間企業に就職。熊本、福岡など九州を転勤しながら、いくつかの仕事を経験。平成16年、28歳の時に大津町役場に入庁。企画財政課、企画課などを経て、平成24年から現職。3年目に広報担当を拝命し、6年間「広報おおつ」を作り続けた。その間、妻、娘、息子を放置プレイしていたが、6年間の広報担当を終え、イクメンを目指して奮闘中。座右の銘は「一期一会」

しょう。

「自分が持っている常識が本当に正しいものなのか」——いろいろな視点から考えることに気を付けるようになった私は、いろいろな機会から逃げずに積極的に経験を重ねました（もちろん、時間は有限ですからできなかったこともたくさんありました）。しかし、10代から20代でこのような多彩な経験をしたことは、今の自分にとっても生かされています。

広報との、人との出会い

公務員になり、30歳の春を迎えました。ここで私のターニングポイントが訪れます。広報を担当することになったのです。結果的に6年間担当することになった広報は、私の価値観や考え方を大きく変えてくれま



した。人との出会いやそこから得た技術は、今でも自分の中で大切なものとなっています。

しかし、それもその時には予想できなかったことです。

広報担当者と言えば、取材に編集、写真撮影に原稿作成とやることはとても多いです。それこそ自分が持っていた技術で生かせるものは何

もない。となれば、学ばしかなかった。「日々是勉強」

です。積極的に研修会に参加したり、本を買って独学したりすることで努力を続けました。

ここで一つエピソードを紹介しましょう。

行政広報誌には「広報コンクール」というものがあります。出品されたその年の広報誌を審査して表彰されるものです。

私はコンクールを外部評価のようなものと考え、また「広報を広報する」という意味から毎年出品するようにしていました。

そして、偶然にも2年目に作った広報誌が、全国広報コンクールで入選し、表彰式（香川県高松市で開催）に参加することになりました。表彰式は、日本広報協会が主催する「全国広報広聴研究大会」の中で行われるので、受賞者以外にも全国から多くの人を訪れていました。そこで、全国のいろんな人と話したこと、教えてもらったことは、今でも人生の大切な思い出の1ページになって

います。

そんな時、大会の懇親会である人から「冬に成田市で広報セミナーを開催するから来てください」と誘われました。元来、人見知りの私。知っている人もいないし、遠いので旅費もかかるし……などと悩みましたが、これで何かが変わるならと一念発起して参加することにしました。休みを取って自腹で参加する初めての研修です。

一人で参加した成田では多くの出会いがありました。今でもいただいた名刺は大切に保管しています。そして、大切な出会いの一つに畠山浩さんとの出会いがありました。

畠山浩さんは岩手県藤沢町役場（現一関市役所）で広報を担当し、全国広報コンクールで二度の日本一に輝くなど、全国の広報担当者から注目されている素晴らしい人です（本誌のシリーズ「風を起こすV.O.」101でも取り上げられています）。

そんな畠山さんとの出会いでいろんなことを学び、つながりは急速に広がっていきます。全国各県に仲間が増え、以前には予想できなかったであろう出会いが生まれました。いろんな偶然が重なって良い連鎖を起こしていました。

そして、できたこと

つながりが地域に変化を起こすと信じている私は、それからというもの、県内の研修会で講師をしたり、企画のお手伝いをしたりするなど、広報担当者同士のつながりを深めるために努力しました。努力はそんなに難しいことはありませんが、努力を続けることはとても難しいです。しかし、続けていることで困難な環境でもいつかチャンスはやってきます。

その結果、熊本県では県内の担当者が合同で特集記事を作成し、市町村の広報誌にそれぞれ掲載する「熊本県広報協会合同特集」を始めることができました。これは全国でも例のないことで、その取り組みは全国広報コンクールでも表彰されました。合同特集は今でも続いており、今年で5年目を迎



合同特集は熊本県出身のスザンヌさんと小山薫堂さん取材。
表紙も行政広報誌には見えない

熊本と宮崎の仲間。
こんな仲間がいたからこそ
私は頑張れた



えます。この企画は「県内全体が変われば、自分のまちなも変わる」という趣旨で進めました。外を向いた活動だけでなく、内側を向いた活動でもあったのです。

この記事作成には、多くの担当者が参加し、お互いがつながることができました。そういつたつながりの強化の一部を担うことができたのも、いろんな出会いを通じて学んだことが多かったからです。

「後の自分にとって大切なものは、今は分からない。だから、いろんなことに挑戦し

経験して、良し悪しを自分で判断しよう。そして、得たものを町のために生かそう」

このように考え、自分でキャリアデザインを進めていったのです。広報の仕事に関わらせていただけたのはとても有益なことでした。

もちろん、広報だけが特別な仕事だとは言いません。異動してその部署での業務を行うには、多くのことを覚えないといけません。そのためには研修会や自学が必要になります。チャンスを生かすも殺すも自分次第なのです。私は今、福祉の部署で働いていますが、多くの学びがあります。いろんな視点で物事を見ることの大切さをあらためて痛感しています。まだまだ学ぶことはたくさんありそうです。

計画的偶発性理論

いろんなことを振り返ってみて、このような素晴らしい経験ができるのは予想できませんでした。もちろん予想して行動していたとしてもその通りにはならなかったでしょう。多くのことは自分の行動だけではなく、いろんな人の行動や関わりによって変化していきます。つまりは、目標を決めてキャリアデザインを進めていくことは難しいのではないだろうかと思うのです。

スタンフォード大学のJ. D. クランボルト教授が提唱する「計画的偶発性理論」というものがあります。キャリアデザインの多く（8割はあると言われます）は偶発的なものに影響され、形成される。であれば、いろいろな機会を最大限に生かすことで、偶発的に起きるチャンスをつかむことができる——という理論です。この理論で大事なことでとして挙げられているのが、「好奇心」「持続性」「楽観性」「柔軟性」「冒険心（リスクテイキング）」の5つです。この5つの行動に気を付けると計画的な偶発性は生まれやすいと言われています。

この理論を知った私に響いたのは「リスクテイキング」でした。リスクと分かっているながらテイクすることは、無駄なことと思えます。しかし、それは本当に無駄なことなのでしょうか。

私は広報を担当していた時に、事前に予想することができない素晴らしい経験をしま

した。しかし、元をたどれば高松市や成田市に一人で行ったことがきっかけだったので。研修会やセミナーも行かなければ、何も変わりません。休みを取って自費で参加する——。リスクをテイクしたからこそ、その経験につながったのだと思います。

それはメリットなのか、デメリットなのか。デメリットは本当に「デメリットなのか」。理論を知らなくても動くことができたのは、今までの経験からだと思っています。だから「無駄なことなど何もない」と胸を張って言えます。

「チャンスの女神は前髪しかない」と言います。機会が来た時に努力をし続けているから、チャンスをつかみ取ることができるのです。「運も実力のうち」とはこのような意味があるのだと思っています。

運命の出会い

この出会いは奇跡的な出会いだ。もはや「運命の出会い」と言うしかない——。という出会いが一生のうち数度はあると思います。生まれた年代が違っただけでも出会うことはできませんし、育った地域が違っても同じです。

「人間は一生のうち逢うべき人には必ず逢える。一瞬早すぎず一瞬遅すぎもしない時に」哲学者であり教育者でもある森信三さんの言葉です。実はその言葉はここで終わりません。

「ただし内に求める心無くば、縁は生ぜず」

出会いやつながりとは、相手の人間性の問題だけではなく、自分のスタンスも大切な要因です。その人が大事な人であるかどうかは自分が決めています。自分の心の置き方で相手は素晴らしい人にもなるし、嫌な人にもなります。つまり、「逢うべき人」とは「その人のような、その人に会える」ことだと思っています。やっぱり、運命の出会いには自分の行動によって決まるのだなあ……としみじみと思います。

人は鏡のようなものです。笑えば笑い返してくれるし、一歩踏み出せば、相手も一歩近寄ってくれます。人とのつながりがあれば、何かの目標を果たす時に立ち足はだる障壁も乗り越えられやすくなります。私は組織だけではなく、広い範囲で多くのつながりを求めています。そのつながりという宝物は、地方公務員としての私にきつと役に立つと思っているからです。まちづくりに生かされると信じているからです。

人生をデザインする

「永遠に生きるかのように学べ、明日死ぬかのように生きろ」

インドのマハトマ・ガンジーの言った、私の大好きな言葉です。

私は23歳の時にある挫折を経験したことがあります。それは立ち直るのに時間がかかるほどの大きな挫折でした。「どうせいつかは死んでしまうのに、こんなに頑張っただけになるのだろう」——そんなことを考えてし

まうほどでした。そんな時にこの言葉に出会って意味を理解した瞬間、目の前がぱっと明るくなったのを覚えています。「人生を自分でコーディネートしていくと、人生はもっと面白い」と感じるようになった瞬間でした。

それから、どうやって学ぶかどうやって生きるかを常に（たまたに忘れることもありませんが）頭の中に入れて行動しています。「知識をインプットした後、アウトプットするためにどう行動するのか」——キャリアデザインの考えは、定年まで生かすのではなく、人生が終わるまで生かすことができると思います。知識や技術をどう生かすかと考えると自分だけの問題ではなくなります。公務員の私にとって、それは命題とも言えるかもしれません。

自分の価値を生かすことを考えると、アイデンティティーは急速に高まっていきました。大きく言えば「どう生きて、どう死ぬか」でしょう。

今までとこれから

この記事を書稿する際に、自分の半生を振り返ってみました。自分を見つめ直し、知れば知るほど自分を作ってきたものが分かってきました。「頼まれたことでも断らずにやってみる」——これだけで自分のキャリアが作られてきました。

これからの人生がどうなるか分からないように、どのようにキャリアを築いていくか、どんなことが必要とされるのかは分かりませ



常に上を向いていた。仲間と空でつながっていた

ん。だからこそ、自分で聞いて、見て行動することで、長いスパンでのキャリアデザインの生かされるのだと思います。

人の価値観がそれぞれ違うように、得手不得手もそれぞれです。一人一人の多様性を理解して、努力する過程こそが一番大切なものではないかと思えます。結果だけを求めている、つながりは生まれません。相手の気持ちを理解しようというスタンスがつながりを生むのです。

これまでに出会った「運命の人」たちともお互いに理解し合うことで、共感し、共に走ることができました。そんな仲間たちのおかげで私のキャリアは大きく広がり、自信につながりました。いくら感謝しても感謝したりません。これからも運を味方につけて、つながりを求め、深めていきたいと考えています。

人生は長いようで短いもの。いくつになっても学び続けるような生き方をしたいと思っています。これからも「食わず嫌い」をせずに、何でもやってみようの精神でキャリアを積み重ねていけば、きっと未来は明るく、楽しいものになると信じています。